

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

国語・日本語
教育部門

あわせて文部科学大臣賞受賞
文部科学大臣賞は、「博報賞」受賞者の中から
各部門1件まで、特に奨励に値する実践に贈られます。

群馬県



伊勢崎市教育研究所 日本語教育研究班

発表の過程を通して
子どもたちの自信と
やる気をうながす

伊勢崎市は、人口の約5%にあたる1万2000人以上の外国人が暮らす、全国でも有数の外国人集住地域だ。現在、市内34の公立小中学校に通う外国籍の子どもは1000人ほどで、日本語指導を必要とする子どもは年々増え続けている。

この日、全校生徒の約10%が外国籍だという伊勢崎市立境南中学校では、佐藤康教諭による特別な授業が行われていた。通常、外国籍の生徒のみで行われる日本語教室に、生徒会役員の日本人生徒3名が迎えられていたのだ。授業の発表者となったのは、アフガニスタン・バングラデシュ・パキスタン・フィリピン・ブラジルなど、多様な国にルーツを持つ生徒たち。

自ら作成した母国を紹介する大きなポスターを指し示しながら、日本語で一語ずつゆっくりと丁寧に説明する姿に、教室の全員が「もっとみんなの文化を理解したい」と、思いを新たにしようだった。

伊勢崎市教育研究所日本語教育研究班は、支援が必要な外国籍の子どもたち一人ひとりの、教育的ニーズに応えることを目的に、日本語教室担当教員6名が立ち上げた活動だ。

伊勢崎市教育研究所の下田仁所長は、「教師自らが名乗りを上げて、自主研究班として取り組んでいる活動が、博報賞という評価を受けたことは心からの励みになると感じます」と語る。

発足時の代表、伊勢崎市立坂東小学校の大澤成基教諭は、「日本語指導の課題は、各学校の担当教員の裁量に任せられ、教員は一人で悩みを抱えている状態でした」と振り返る。

「そんな中、互助会的な集まりがあったらいいねと、有志が集い、2013年に活動をスタートさせたのです」（大澤成基教諭）

外国籍生徒の
9割以上が高等学校に
進学している

背景も年齢も多様な子ども

たちに、いかに日本語指導の仕組みを構築すればいいのかがという、教員たちの地道な研究は、やがて専門家や教育委員会の支援を得て実を結ぶ。子どもの日本語力を見とる「ものさし」となる独自の指標、「伊勢崎市 日本語ステップ」が作られたのだ。

日本語ステップは、これまで

で教員の裁量によっていた支援を標準化。誰でも活用できる共通指標としての役割を果たす。また「日常会話の力」と「学習活動に参加する力」に分けて、ことばの発達の様子を見とることで、日常は問題なく日本語を話しているようでも、学習場面では苦勞するという子どもへの課題に寄り添う。

「例えば、平行、垂直ということばは、日常会話には出てきません。学習語彙は生活語彙と全く異なっているのです」と大澤教諭は指摘する。

日本語研究班はさらに、来日直後の外国人児童生徒の受け入れ対応のための、日本語初期指導プログラム「はじめの8歩」、効率的かつ計画的な指導計画を可能にするオリジナルの「個別の指導計画」を開発。活動開始から4年後の2017年には、指導冊子「つながる・ひろがる ISES A K1ステップ」に、これらの



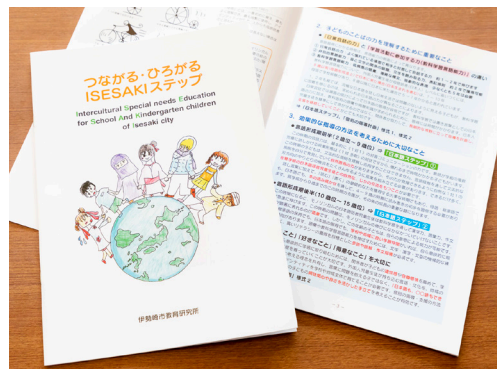
ひらがなシートを指し、「あ」「い」と、発音する先生の口元を見つめ、繰り返して声に出す1年生。



ムスリムの挨拶を紹介するのは、アフガニスタン出身の生徒（左）とパキスタン出身の生徒（右）。

研究を集大成して、冊子にまとめ上げて市内の幼稚園から小中学校に配布した。

「日本語指導を始めた当初、教員たちは子どもたちに、とにかく日本語の力をつけよう」と指導にきゅうきゅうとしていました。しかし、指導の中で子どもたちが、『わかる』『できる』と感じる場面を、たくさん作ってあげることが大切だということに気づいたのです。タイトル「ひろがる」には、子どもたちが日本語学習を通じて、将来の夢や希望を持つてほしいという想いが込められています」（大澤教諭）



日本語指導の共通指標『つながる・ひろがる ISES A K1ステップ』。



今後も実践を通じて内容を深めていきたいと語る大澤教諭。



佐藤教諭の授業の様子。自分が育った国の文化について調べてまとめ、ポスター発表を行う生徒たち。発表後は質問も飛び交い、お互いの文化への理解を深めた。

「ひろがることば・夢・希望」 日本語を母語としない子どもへの 日本語指導プログラムの開発

外国籍の児童生徒が、「わかる」「できる」を実感できる独自の日本語指導プログラムを開発し、子どもたちの未来を見据えた支援を続ける実践に、博報賞が贈られた。

お祝いのことば

群馬県教育委員会

笠原寛 教育長

第49回博報賞並びに文部科学大臣賞の受賞、誠にありがとうございます。これまでの研究成果や各学校で実践された内容等が高く評価されましたことに対して、県教育委員会を代表してお祝いを申し上げます。本県でも、外国につながるある児童生徒は年々増加する傾向にあります。その子どもたち一人ひとりが、もてる力を十分に発揮できるよう、日本語教育の充実に向けて献身的に取り組んでいる多くの関係者にとっても、今回の受賞は、大変意義あるものと考えております。今後も一層研究を進め、その成果を広く役立てていただくことを強く期待しております。